ALICE実験での 電子対の結果と展望



関畑 大貴 (東大CNS)

Heavy Ion Pub 2021年5月28日 References:

<u>arXiv:2005.14522</u> (submitted to PRL) <u>Phys. Rev. C102(2020)055204</u> <u>Phys. Lett. B 788 (2019) 505</u> <u>Phys. Rev. C 99, 024002</u> <u>JHEP 1809 (2018) 064</u>

arXiv:2104.07050 arXiv:2103.16623 Phys. Lett. B 814 (2021) 136114 arXiv:1812.02820

物理的動機



- 低質量領域 : m_{ee} < 1.1 GeV/c²
 - 熱輻射仮想光子 (m_{ee}→0 極限)
 - ベクトル中間子を通じたカイラル対称性 の部分的回復
- 中間質量領域 : 1.1 < m_{ee} < 2.7 GeV/c²
 - 熱輻射電子対
 - 重クォーク起源電子対の(脱)相関
 - かすり衝突での干渉光生成
- 高質量領域: 2.7 GeV/c² < m_{ee}
 - J/ψ中間子
 - Drell-Yan過程

(私の考える)電磁プローブの意義



Direct photon productions



Thermal dilepton production

色荷をもたず、強い相互作用をしない

- 生成された時点での情報をもたらす

- QGP相に対して透過的

→流体膨張するQGP相の初期状態特定 (ALICEの強み) • 実験的な困難

- 全段階から電磁放射されるので、背景事象との戦い

- 信号は既知成分との差として測定する

ATLAS, CMS, LHCbの強みとして:

- Z/W/γでパートン分布関数を決定
- Z/γーJet抑制と組み合わせることで、
 エネルギー損失しない基準値

ALICE検出器



粒子識別性能



ALI-PERF-107348

- ・異なる手法を使って、異なる運動量領域を覆う。
- •LHC加速器実験の中でも、強い粒子識別能力をもつ。
- •本講演では、電子に着目する。

熱(仮想)光子に関する結果



仮想光子生成 Pb-Pb collisions at √s_{NN} = 2.76 TeV



・実光子と相補的な手法 (m_{ee}→0 極限)

r : 直接光子と全光子の比 R_γ : 全光子と崩壊光子の比

- •ハドロン崩壊起源電子対を超えた成分:直接仮想光子
- 統計を蓄積することが必須→2018年のPbPbデータに期待

小さい系での光子生成

https://cds.cern.ch/record/2317190



・最小バイアスデータ: null consistent

r:直接光子と全光子の比

- 高粒子多重度事象:統計的優位度~2.5σ
- ・上図の結果は2016 dataのみ。今後の解析(2016+17+18)に期待。

小さい系での光子生成

0.060

0.003

https://cds.cern.ch/record/2317190



0.083

0.007

- ・高粒子多重度事象:統計的に優位
- 系統誤差が大きい
 - η/π⁰のm_T scalingが原因(後述)
- •理論模型と比較しながら、小さい系での熱輻射光子を探索中。

High multiplicity

pQCD

0.055

0.013

電子対生成 central Pb-Pb collisions at √s_{NN} = 5.02 TeV



- 2015年のPb-Pb衝突からの結果 (0-20%)
 - 熱的電子対を含む計算と誤差の範囲で一致
- ・新たなチャンネル:熱的電子対
 - 実は、熱輻射光子は青方偏移している
 - GeV/c²領域の電子対からQGP相の 初期高温状態に到達する。
 - チャームハドロン起源電子が主背景事象
- ハドロン化に伴う光子生成
 - 電磁プラズマの中性化に伴う光子生成と同様
 - クォーク再結合模型の改善

熱光子の困難さを改善する熱的電子対



- 実は、熱光子の運動量分布は青方偏移して、 <mark>高温状態</mark>、ハドロン相近傍の区別がつかない - 熱光子パズル (大きな収量、大きなv₂)
- •新たなチャンネル:熱的電子対
 - GeV/c²領域の電子対からQGP相の <mark>高温状態</mark>に到達する。
 - ー方、光子の意義は、ハドロン化に伴う光子生成 - 電磁プラズマの中性化に伴う光子生成と同様
 - クォーク再結合模型の改善
 - ハドロン相近傍の熱輻射が多いことを利用

NPA 967 (2017) pp.704-707

関畑 大貴 (東大CNS)

• 熱光子

重クォークに関する結果



- 重ハドロンの半レプトン崩壊起源電子対
- その角度相関が不変質量・運動量分布に現れる。
 - ppをベースライン(ほぼ反対方向)
 - QGP中でどれだけ拡散されるか (相関が失われるか)
- 熱的電子対にとっては背景事象
- 長寿命の特徴を活かして、衝突点からの距離で 判別する。
 - D meson : cτ ~ 150 μm
 - B meson : cτ ~ 500 μm

Dielectron production in pp collisions at $\sqrt{s} = 5.02$ TeV



- ・同エネルギーpPb, PbPb衝突のためのベースライン測定
- •特に重クォーク生成断面積を測定したのが有意義

DCA analysis in pp collisions at $\sqrt{s} = 7$ TeV



- 特に、Run1データでは、従来の
 - 電子対不変質量分布
 - 横運動量分布

に加えて、DCA分布を初測定した。

将来のDCA解析による重ハドロン起源電子除去の可能性を示した。
 D meson : cτ ~ 150 μm

B meson : cτ ~ 500 μm



 \rightarrow DCA_{ee}(thermal) >> DCA_{ee}(HF)

HF production cross sections in pp collisions at different energies



- ・D中間子測定、単電子b→(c→)e測定の結果とよく一致(at 7 TeV)。
- ・(大きな誤差の範囲で)FONLLと衝突エネルギー依存性も再現。

Dielectron production in p-Pb collisions at $\sqrt{s_{NN}}$ = 5.02 TeV



・重クォーク起源電子対カクテルは、pp衝突での実測値を質量数A倍したもの。

R_{pPb} of dielectron in p-Pb collisions at $\sqrt{s_{NN}}$ = 5.02 TeV



- ・初のデータ点同士で割り算したR_{pA}
- 1.1 < m_{ee} < 2.7 GeV/c²では、 shadowing (EPS09)ではなく、 thermal radiation(HG+QGP)を好む。

R_{pPb} of dielectron in p-Pb collisions at $\sqrt{s_{NN}}$ = 5.02 TeV



- ・初のデータ点同士で割り算したR_{pA}
- 1.1 < m_{ee} < 2.7 GeV/c²では、 shadowing (EPS09)ではなく、 thermal radiation(HG+QGP)を好む。
- 横運動量の関数として見ても、thermal radiation と一致。
- まだ誤差が大きいので、将来のDCA解析による チャームハドロン起源電子除去に期待。

- shadowingで減る or

- thermal radiationで増える

低横運動量電子対の増大に関する結果



Phys. Rev. Lett. 121.132301 (2018)



- 超かすり衝突(Ultra Peripheral Collisions)
 - 加速した重イオンビームの電磁場で レプトン対が生成

• 超かすり衝突 + ハドロン衝突

- 高精度で計算可能なQEDをプローブとして 研究対象となるQCD物質に打ち込む

- かすり衝突ではQGPの寿命が短いので 困難さもある。

- 強磁場があると、電子対の角度差分布、 平均横運動量に変化が現れる

かすり衝突での低横運動量電子対の増大





- Coherent photoproductionと一致。
- 2015+2018 ~ 統計量約2倍
- 平均横運動量や角度差分布にも挑戦。(強磁場探索)

2021年5月28日

pp衝突での電子対の増大 √s = 63 GeV



V.Hedberg, Ph.D thesis, Lund University, 1987 at the ISR

- CERN ISR AFSでの電子対増大
 - $p_{T,ee} < 1 \text{ GeV/c}$
 - 未だに説明がついていない

- 追実験もない

ALICEでの低磁場データ(B = 0.2 T)

 - p_{T,e} > 75 MeV/c
 - TOFでの電子識別が低運動量でも可能

η/π⁰の改善が必須

η/π⁰の実験的改善



m_T scalingをやめて、SPS実験データから制限

- η/π⁰は衝突エネルギーに依存しない

- 低横運動量で強い制限を与える

(- 今後のためにも、B = 0.2 TのALICEデータでの η/π^0 を求む。)

pp衝突での電子対の増大 √s = 13 TeV with low B field



2021年5月28日

pp衝突での電子対の増大 √s = 13 TeV with low B field



pp衝突での電子対の増大 √s = 13 TeV with low B field





- GEM-TPC換装による高統計データ収集と
- •新ITSによる衝突点決定精度向上の組み合わせで初めて可能になる。

まとめ

- ・Run2データからも続々と電子対の結果を公表している。
 - 同じ衝突エネルギーで大小様々な系(pp, pPb, PbPb @ 5.02 TeV)
 - 低横運動量電子対の増大
- Run3へ向けたALICE高度化
 - 100倍のデータ収集能力(GEM-TPC)
 - 衝突点分解能向上(ITS, MFT)



ミューオン対



- Excellent mass resolution for dimuons thanks to MFT
- ρ meson mass spectrum with ~ 20% uncertainty @ M_{µµ} = 0.5 GeV/c²





• Reject dileptons from cc pairs by DCA



中間質量領域からの平均温度抽出



- Reject dileptons from cc pairs by DCA
- $dN/dM \propto exp(-M/T)$



ALI-SIMUL-306864

$p_{\rm T}$ spectra of dileptons and inverse slope of exp(- $p_{\rm T}/T_{\rm eff}$)



Eur. Phys. J. C (2009) 59: 607-623

- Inverse slope parameter T_{eff} : sensitive to radial flow velocity β as "barometer"
- Expected relative stat. uncertainty ~ 1% for $T_{\rm eff}$ in Run 3-4 $T_{\rm eff}\simeq T+M\langle\beta\rangle^2$

Dilepton flow



Phys. Rev. C 101, 044904 (2020), Gojko Vujanovic et. al.

- Important to measure not only dN/dM, but also v₂
- Sensitive to shear and bulk viscosity
- Expected relative stat. uncertainty ~ 10% in Run 3-4

Future pp program at $\sqrt{s} = 14 \text{ TeV}$

arXiv:2005.14522



2021年5月28日

- Reduced solenoid magnetic field 0.2 T
 - $p_{\rm T,e}$ > 75 MeV/c
 - η/π^0 ratio at low p_T
- Expected $L_{int} \sim 3 \text{ pb}^{-1}$ (x 300 more than Run 2 data)
 - multi-differential analysis in $m_{\rm ee}$, $p_{\rm T,ee}$, multiplicity
- Unique sensitivity to soft dielectron at RHIC and the LHC

- So far, the excess is described by neither hadronic bremsstrahlung nor thermal radiation.

http://cds.cern.ch/record/2724925/files/ALICE_HEpp_PublNote.pdf

backup